

自己の行動原因の認知傾向

——強制と自発——

TWO TYPES OF PERCEPTION ON THE CAUSES OF ONE'S OWN BEHAVIORS

宮 下 一 博* 坂 西 友 秀** 根 本 橘 夫

Kazuhiro Miyashita, Tomohide Banzai, Kitsuo Nemoto

1. 問題と目的

心理学において、種々の動機に関する理論が提出されてきた。確かに我々の行動は、外的環境刺激が内的動因に転化されることなしには生じ得ない。しかし、だからと言って、我々は常に自らの欲求として行動するわけではない。社会的環境のなかに生活する人間は、自らは欲求しないが外的状況が強制するために、やむを得ず行動するという場合も多い。

本研究は、行動の原因に対する認知に次の二種があると仮定する。

①行動の原因は、自分自身の内的欲求にあるという認知 (Self-Initiated という意味でSIと略記する)。

②行動の原因は、自分自身の欲求ではなく環境の強制力であるという認知 (Coerced という意味でCoと略記する)。

ここで、環境の強制力とは、具体的には命令、規則、慣習、義理、しがらみ、集団圧力、他者の期待等々が考えられる。

行動の原因のこうした認知と、それに随伴する心理には密接な関係が存在すると思われる。通常、自発的欲求に基づく行動と認知した場合には、人はその行動を楽しみ、没頭し、たとえ困難に遭遇しても克服のための努力と工夫を自発的に行うだろう。これに対し、強制された行動の場合には、快感情は伴わず、できるだけ短時間で、できるだけ少ないエネルギー放出ですませようとする。また、自発的欲求に基づく場合には学習効率が高く、かつ課題解決の水準も高くなるのが普通である。

上述の認知は、各々の個別的行動について成立しうる。具体的行動について、強制された行動と認知するか自発的行動と認知するかを規定する要因の研究は、たとえば、Brehm & Cohen (1962)などによってなされてきた。

本研究では、こうした認知の二つのタイプは、個々の具体的行動をこえて一個人のなかでかなり一般的な認知傾向として存在すると考える。すなわち、ある人は自己の行動を自らの欲求に基づく認知する傾向が強い (SI型) のに対し、他のある人は強制されたものと認知する傾向が強い (Co型)。従って、行動を特定することなしに、各個人の行動の原因の認知傾向を測定しうるものとする。

このような仮定が成立するための一つの条件は、行為者が自分の個々の具体的行動についてその原因を必ずしも明確に理解できないことである。人は自らの行動の原因を必ずしも常に明確に認知しているものではないことを実証した研究が積み重ねられつつある (たとえば、Schachter & Singer 1962, Bem 1965, Davison & Valins 1969, Kiesler et al. 1969, Nis-

bett & Valins 1971)。現実の社会における我々の行動は、強制される側面と自発的側面を常に明確に分離しうるものではない。強制されてする行動のなかにも自発的な欲求を満足させる部分を含みうるし、その逆もまたありうるからである。

自発的という認知と、強制的という認知とは、概念的には相対立するものである。しかし、現実には、上のような事情を反映して、一個人のなかで混在すると思われる。従って、本研究では、こうした認知のタイプを相対的な強さの程度として把握する。

本概念は、帰属(attribution)のある側面を扱っていると言える。しかし、Rotterらのいわゆる Locus of Control の概念と混同さるべきでない。Locus of Control の概念は、行動の「結果」の解釈に関わるものであり、基本的には「強化」の統制者についての認知(帰属)を扱ったものである(Rotter, 1966)。これに対し本概念は、行動の「原因」の解釈に関わるものであり、いわば「行動」の統制者の認知(帰属)を扱った概念である(もっともたとえば Solomon & Oberlander, 1974 らのように、Locus of Control の概念を拡大して、本概念もそれに含まれるとする研究者もいる)。

本概念は、種々の研究の展開の可能性をもつ。第一に、行動を強制されたものとしてとらえることは、動機論に新たな視点をつけ加える。たとえば、行動が強制される状況では、遂行行動は緊張低減ではなく、かえって緊張の高揚をもたらすこともある。第二に、個人の行動のしかたのある側面(たとえば、投げやりであるとか、没頭するとか、積極的であるなど)を説明する。第三に社会心理学的な現象を研究の俎上にのせることを可能にする。たとえば、現在の学生は「何々させられている」という表現をしばしば口にする。これはまさに、行動が強制されているという認知を語っていることばにはかならない。現代青年の多くの問題が、こうした認知傾向と相伴って出現していると考えられる。また、発達心理学的な研究も可能である。幼少時から多くの自発的行動を阻止されているように思われる現在の子どもは、自己の行動をいかなるものととらえているであろうか。最後に、こうした認知傾向と適応との関係も興味ある問題である。

本研究は、以上のような問題意識に立脚している。本稿では、認知のタイプを弁別する尺度の作成を行い、認知傾向といくつかの心理的特質との関係を検討することとする。

II. スケールの作成

本研究に先立ち二種の認知傾向の強さを測定する尺度を作成した。

方法 <項目の作成> SI および Co の定義に従って、対応する項目を30項目作成した。このうちから、定義に厳密に対応すること、また、項目内容ができるだけ重ならないこと、という二つの観点から19項目を選択した。

<項目の妥当性判断> 一枚のカードに一項目ずつ書き、それぞれの項目に「はい」と答える人は、SI型、Co型のいずれの認知傾向かを分類させた。判断者は心理学専攻の大学院生および学部4年生20名である。一名が不注意により二つの項目を誤って分類した以外、分類は完全に一致した。 <項目分析> 19項目を一枚の質問紙に印刷し、大学生233名に施行した。なお、質問紙は他に無関連項目をいれてあるので29項目より成る。インストラクションは以下の通りである。「次の質問に対し自分の気持ちに当てはまる場合は○を、当てはまらない場合は×を、()の中に記入して下さい。あまり考えすぎるとわからなくなりますから、感じたままをさっさと答えて下さればけっこうです。判断に迷う場合も、必ず○か×のどちらかに決めて下さい。」

SIの方向に答えた場合を1点とし、各回答者の得点を算出した。これにより、上位25%に当る54名および下位25%に当る55名を選び出し、GP分析を行った。19項目すべてに高度の有意

差が認められた (Table 1 参照)。

Table 1. 項目と項目分析

項	目	Keyされて いる回答・	χ^2 値	
1.	いつも自分がしたいと思うことばかりをしている。	○	18.75	P<.001
2.	周囲の事情に強制されて行動することが多い。	×	45.76	P<.001
3.	私の行動の原因は自分の要求そのものである。	○	48.12	P<.001
4.	自分の要求というより何か他の事情から行動することが多い。	×	97.36	P<.001
5.	自分自身の欲求から行動することが多い。	○	62.35	P<.001
6.	「本当にしたいことは今していることとは別なことだ」と思うことがよくある。	×	64.91	P<.001
7.	自分の行動は自分自身の内的要求によって決定されている。	○	39.27	P<.001
8.	自分の行動の原因は自分の要求とは別なものである。	×	50.03	P<.001
9.	興味のままに行動することが多い。	○	14.13	P<.001
10.	私は自分の要求を満たすために行動する。	○	25.42	P<.001
11.	自分がしたいこととは別なことをさせられている。	×	59.62	P<.001
12.	自分のしたいことをしている。	○	43.65	P<.001
13.	周囲の状況からやむなく行動することが多い。	×	76.64	P<.001
14.	いつもしたくないことをさせられていると感じている。	×	19.77	P<.001
15.	「本当にしたいことは別なことだ」と思うようなことはほとんどない。	○	37.32	P<.001
16.	自分のしたくないことをさせられていると思う。	×	43.16	P<.001
17.	まわりからせき立てられて行動することが多い。	×	47.92	P<.001
18.	自分がしたいこととはうらはらは行動をせざるをえない場合が多い。	×	64.03	P<.001
19.	自分の行動は自分の要求を満たすためのものであると思う。	○	34.82	P<.001

※ 記載のように答えるとSI型の認識様式とされる。反対の回答は、Co型とされる。

結果 以上の手続きにより、Table 1の19項目を最終項目とした。各項目ともSIの方向に回答した場合に1点を与えるので、最高19点、最低0点である。

作成された尺度を大学生360名(男子77名、女子283名)に施行した。その得点分布を示したものがFig.1である(Fig.1参照)。

男子での平均は10.56、標準偏差4.07であり、女子では平均11.32、標準偏差4.37であった。また、全体の平均は11.16、標準偏差4.31であった。なお、クーダー・リチャードソンの第20公式による信頼度係数は0.648であった。

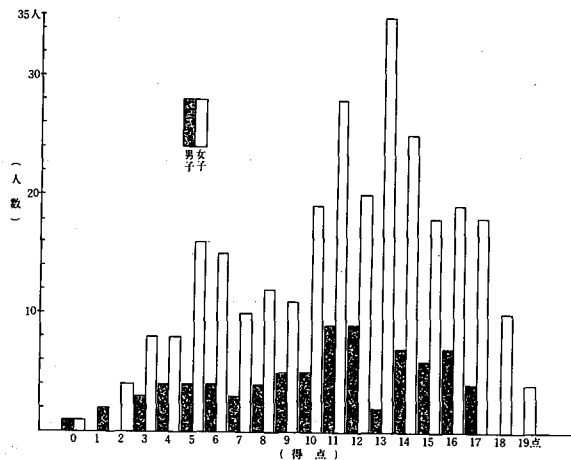


Fig. 1 尺度の得点分布

III. 二種の認知と人世観・社会観等との関係

目的 SI型とCo型とで、人生観・社会観などにいかなる差異が認められるか検討する。

方法 <質問紙の作成>政治・社会、日常生活、対人関係、道徳・規律、趣味の5領域を設定し、各領域ごとに2~4の小領域を設けた。たとえば、政治・社会の領域では、社会を自己を拡

大する場と捉えるか自己抑圧の場と捉えるかとか、貧富や犯罪の責任をその人自身に帰属させるか社会に帰属させるか、等々である。

これら小領域ごとに数項目ずつに質問項目を作成した。各項目の内容的妥当性を3名の研究者が判断し、判断の一致した57項目を最終的に採用した。なお、回答はすべて5段階評定（かなり合っている—かなり違っている）である。

〈対象〉大学生男子265名、女子222名、

〈実施法〉SI-Co尺度と質問紙を集团的に施行した。回答所要時間は、15～20分であった。

結果 尺度の得点をもとに、SI型傾向の強い者（SI）、Co型傾向の強い者（Co）、及びその中間の者（M）をそれぞれ男女ごとに50名ずつ選出した。

質問紙への回答は、各項目に対する回答を1～5点と得点化し、それぞれの小領域ごとに被験者の得点を算出した。この数値に基づき一要因の分散分析を施行した。

以下の表には、小領域ごとの各群の平均値及び標準偏差を示す。

〔政治・社会に関する意識〕

政治・社会に関する意識の結果をTable 2.に示す。

Table 2 社会に関する意識

内 容	性	SI	M	Co	
㉑ 社会を自己拡大の場ととらえる程度。	M	12.76 (2.51)	11.82 (2.55)	11.82 (2.99)	N. S.
	F	12.26 (2.98)	12.44 (2.48)	12.18 (2.93)	N. S.
㉒ 社会を変革可能ととらえる程度。	M	12.26 (3.44)	11.50 (3.35)	11.20 (3.26)	N. S.
	F	11.30 (1.08)	12.12 (3.68)	11.50 (3.51)	N. S.
㉓ 政治への関心の程度。	M	12.88 (3.14)	12.50 (3.56)	12.20 (2.97)	N. S.
	F	12.48 (3.02)	14.14 (3.08)	12.12 (2.96)	P<.01
㉔ 貧富や犯罪の責任を個人に帰属させる程度。	M	12.32 (2.49)	11.92 (2.46)	11.76 (2.18)	N. S.
	F	11.86 (3.23)	11.94 (1.81)	12.20 (2.67)	N. S.

㉑まず、社会を自己を拡大する場と捉えるか自己を抑圧する場と捉えるかを検討した。この小領域に該当する項目数は4である。一例を示すと、「社会は人が自分の目的を達成するための場である」といったものである。得点の高いほど自己拡大の場と認識する傾向が強いことを示す。男女とも有意差は認められなかった。

㉒次に、社会を変革可能であると認識するか否かを検討した。項目は「一人一人が働きかければ、それなりに社会は変わる」など4項目である。高得点ほど変革可能と捉えていることを示す。同様に有意差は認められなかった。

自己の行動原因の認知傾向

㉔政治への関心の強さを測定する項目は4項目である。「政治は、政治家に任せておけばよい」などが項目例である。数値が高いほど政治的関心が高いことを示す。女子にのみ有意差が認められた ($F=6.25$, $df=2/147$, $P<.01$)。なおライアン法による下位検定の結果、有意差はM群とSI群及びM群とCo群との間に認められた(各々, $t=2.72$, $P<.01$; $t=3.31$, $P<.01$)。

㉕貧富の差の存在や犯罪の発生を個人の責任と考えるか社会の責任とするかを検討した。項目は、「社会での成功や失敗は、自分の努力以外の要因で決まる」など4項目である。高得点ほど個人に帰属させる傾向が強いことを示す。男女ともに、有意差は認められなかった。

〔日常生活での意識〕

Table 3に、日常生活での意識に関する結果を示す。

Table 3. 日常生活での意識

内 容	性	SI	M	Co	
㉔ 日常生活での目的意識の程度。	M	10.12 (3.17)	8.06 (3.22)	5.76 (2.96)	$P<.01$
	F	9.14 (3.23)	8.30 (3.17)	6.04 (3.62)	$P<.01$
㉕ 充実感の程度。	M	15.06 (2.83)	13.22 (2.27)	12.84 (2.20)	$P<.01$
	F	15.30 (2.66)	14.62 (2.54)	12.14 (3.04)	$P<.01$
㉖ 自己への自信・自尊の程度。	M	14.28 (2.35)	13.08 (2.42)	11.46 (1.77)	$P<.01$
	F	12.94 (2.56)	13.00 (3.49)	10.84 (3.09)	$P<.01$

㉔日常生活を目的を持って送っていると感じているか否かを検討した。項目は、「私には夢があり、それに向かって努力している」など4項目である。得点が高いほど目的意識が強いことを示す。ここでは、男女とも有意差がみられた(男女各々, $F=25.67$, $af=2/147$, $P<.01$; $F=11.25$, $af=2/147$, $P<.01$)。ライアン法による検定では、男子においてSI-M($t=3.27$, $P<.01$), M-Co($t=3.65$, $P<.01$), SI-Co間($t=6.92$, $P<.01$)のすべてに、女子では、M-Co($t=3.34$, $P<.01$), SI-Co間($t=4.59$, $P<.01$)に有意差が認められた。

㉕日常生活で充実感を得ているか否かを検討した。項目は、「毎日毎日が、同じ事のくり返しでつまらない」等4項目である。数値の高いほど充実感が強いことを示す。男女双方に有意差が認められた(各々, $F=11.49$, $df=2/147$, $P<.01$; $F=17.89$, $df=2/147$, $P<.01$)。また、下位検定の結果、男子では、SI-M($t=3.71$, $P<.01$), SI-Co間($t=4.48$, $P<.01$)に、女子では、M-Co($t=4.46$, $P<.01$), SI-Co間($t=5.68$, $P<.01$)にそれぞれ有意差がみられた。

㉖自己に対する自信・自尊の程度を検討した。項目は、「自分は価値ある存在だと思う」など4項目である。得点の高いほど自信を持って生活していることを示す。男女とも有意差が認められた(各々, $F=20.33$, $df=2/147$, $P<.01$; $F=7.86$, $df=2/147$, $P<.01$)。なお、ライアン法による検定の結果、男子では、SI-M($t=2.70$, $P<.01$), M-Co($t=3.65$, $P<.01$), SI-Co間($t=3.39$, $P<.01$)に有意差が認められた。

〔対人関係での意識〕

対人関係に関する意識の結果をTable 4に示す。

Table 4. 対人関係での意識

内 容	性	SI	M	Co	
④ 対人関係を拡大しようとする程度。	M	10.56 (2.52)	10.26 (2.19)	9.40 (2.32)	P<.05
	F	10.90 (2.34)	10.90 (2.33)	9.96 (2.12)	N. S.
⑤ 対人関係を楽しいと感ずる程度。	M	12.94 (3.29)	11.84 (3.23)	11.34 (2.94)	P<.05
	F	12.82 (2.61)	12.97 (2.82)	11.80 (3.10)	N. S.
⑥ リーダーシップをとる程度。	M	9.84 (2.34)	9.30 (2.84)	7.56 (1.99)	P<.01
	F	9.76 (2.39)	9.48 (2.53)	8.12 (3.00)	P<.05

④対人関係を拡大しようとするか縮小しようとするかを検討した。項目は、「人というより一人である方が好きだ」などの項目である。高得点ほど拡大指向が強いことを示す。男子にのみ有意差が認められた ($F=3.22$, $df=2/147$, $P<.05$)。ライアン法による検定では、有意差はSI-Co間に認められた ($t=2.45$, $P<.05$)。

⑤対人的な関わりを楽しんでいるか重荷と感じているかを検討した。項目は、「他の人と話した後は、いつも疲れが残る」等4項目である。数値の高いほど楽しいと感じていることを示す。ここでも、男子にのみ有意差がみられた ($F=3.29$, $df=2/147$, $P<.05$)。ライアン法によると、SI-Co間に有意差が認められた ($t=2.51$, $P<.05$)。

⑥対人関係においてリーダー的傾向が強いかわォロー的傾向が強いかを検討した。項目は、「数人で話をしている時は、大抵は話を聞く役である」など3項目である。得点の高いほどリーダーシップをとる傾向が強いことを示す。男女とも有意差が認められた (各々、 $F=11.92$, $df=2/147$, $P<.01$; $F=6.51$, $df=2/147$, $P<.05$)。ライアン法で検定した結果、有意差は男子では、SI-Co間 ($t=4.67$, $P<.01$)に、女子では、M-Co ($t=2.15$, $P<.05$)、SI-Co間 ($t=2.59$, $P<.05$)にそれぞれ認められた。

〔道徳・規律に関する意識〕

道徳・規律に関する意識の結果をTable 5に示す。

①道徳や規律を破ることに対する心理的抵抗を検討した。項目は、「自分で何か決まりを破ってしまった時には、いやな気持ちになる」など3項目である。高得点ほど破っても合理化可能と認識していることを示す。男女とも有意差は認められなかった。

②道徳・規律からの自由さの程度を検討した。項目は、「規律や慣習などは、できるだけ守るべきである」など4項目である。数値の高いほど、道徳や規律から自由に生きていることを示す。ここでも、男女いずれにおいても、有意差はみられなかった。

自己の行動原因の認知傾向

Table 5. 道徳・規律に関する意識

内 容	性	SI	M	Co	
① 道徳・規律を破る ことに対する心理 的抵抗の程度。	M	6.56 (2.65)	6.96 (2.21)	5.92 (1.73)	N.S.
	F	6.22 (1.98)	5.66 (1.93)	5.96 (1.79)	N.S.
② 道徳・規律からの 自由度。	M	10.56 (2.53)	10.30 (2.28)	10.76 (2.50)	N.S.
	F	10.22 (3.09)	10.10 (2.02)	10.14 (1.58)	N.S.

〔趣味に関する意識〕

趣味に関する意識の結果をTable 6に示す。

Table 6. 趣味に関する意識

内 容	性	SI	M	Co	
① 趣味を単なる楽し みととらえる程度。	M	13.52 (3.20)	14.14 (3.42)	13.10 (2.60)	N.S.
	F	15.28 (2.56)	14.56 (2.20)	14.46 (2.77)	P<.05.
② 趣味の開放度。	M	11.62 (3.17)	11.88 (2.46)	11.06 (0.76)	N.S.
	F	11.34 (2.29)	11.66 (3.53)	10.58 (2.81)	N.S.
③ 趣味の幅	M	14.02 (3.88)	14.32 (2.36)	12.50 (3.75)	P<.05
	F	13.40 (3.58)	12.26 (3.84)	12.24 (3.92)	N.S.

①趣味を単なる楽しみと捉えているか否かを検討した。項目は、「私の趣味は、楽しむためというよりも、何か別の目的のためにある」など4項目である。得点の高いほど単なる娯楽と認識する傾向が強いことを示す。女子にのみ有意差が認められた ($F=3.09$, $df=2/147$, $P<.05$)。ライアン法による検定では、どの2群間にも有意差はみられなかった。

②趣味の開放性、閉鎖性を検討した。項目は、「趣味は一人で楽しむよりは、友達と一諸に楽しめる方が良い」など4項目である。高得点ほど開放的であることを示す。男女とも有意差は認められなかった。

③多趣味であるか否かを検討した。項目は「どちらかという、趣味の幅は狭い方である」など4項目である。数値の高いほど多趣味の傾向が強いことを示す。男子にのみ有意差がみられた ($F=4.04$, $df=2/147$, $P<.05$)。ライアン法による下位検定では、 $M-Co$ ($t=2.65$, $P<.01$)、 $SI-Co$ 間 ($t=2.21$, $P<.05$)にそれぞれ有意差が認められた。

考察 以上みてきたように、政治・社会、道徳・規律の領域では、ほとんど有意差がみられなかった。これに対し、日常生活、対人関係、趣味の領域では、比較的多く有意差が認められ

た。有意差の認められた領域内容から、SI型、Co型の特徴は、次のように結論できる。すなわち、SI型の者は、Co型の者に比べ、一般に自信があり、目的意識を持ち、充実感を得て日々を送っている。また、対人関係では、指導的役割を演ずる傾向が強い。さらに男子では、SI型の者ほど他者との接触を望み、人とのつきあいを自由に楽しんでおり、多趣味の傾向がある。女子では、SI型の者ほど趣味を娯楽的なものと認識している。

政治・社会、道徳・規律の領域でSI-Co間に有意差が得られなかった理由は幾つか考えられる。第一に、質問項目が差異を捉えるのに十分なものでなかった可能性がある。また特に、道徳・規律の領域では、価値的側面が強いために社会的望ましき(Social desirability)などの要因が作用したことも考えられる。第二に、SI型・Co型という認知傾向と、こうした比較的抽象度の高い意識(認識)とは、もともとつながりが希薄なのかも知れない。しかし、本研究の一環として行われた別の研究(坂西・宮下1977)は、これ以外の解釈の可能性を示唆している。すなわち、SI型とCo型とは、同一の回答(具体的反応)を行っても、その理由づけが異なるという傾向が得られているのである。これは、一定の回答(反応)の背後にあるより根底的な意識を分析することの必要性を示唆するものである。次の研究IVでは、この点にも注目することとする。

IV. 二種の認知傾向と認知的不協和解消の様式との関係

目的 前節では、SI型とCo型との意識水準での差異を検討した。本節では、行動との関係へと発展させる第一歩として、質問紙により具体的な認知的不協和事態を設定し、SI型とCo型とで、こうした場面での行動選択に差異が認められるか否かを検討する。また、行動選択の理由づけにおいて、両者間に差がみられるかどうか検討する。

方法 〈質問紙の作成〉文章による場面設定により、認知的不協和の事態を設けた。場面は次の6通りである。

①強制承諾(自己の信念・態度と相反する行為を強いられる事態) ②意見の不一致(自分にとり重要である人と、大切な案件について意見が合致しない事態) ③誘惑(大きな誘惑が自己の行動の変更を迫る事態) ④義理(自己の行動に義理が重くのしかかる事態) ⑤社会道徳(社会モラルに反する行為をする人を目前にしている事態) ⑥信念否定(自己の信念が他者に打ち砕かれる事態)。

項目例をあげると、義理の項目は、「数知れぬ恩を受けた人に家庭教師の仕事を依頼されたが、現在アルバイトは手一杯で、これ以上引き受けては自分の生活が混乱してしまう」という内容であり、この状況で、義理に縛られない自己の生活を優先させる行動(自分の事情を告げ、はっきりことわる)と、義理を重視した行動(仕方なく引き受ける)のいずれかを選択させるものである。

行動の選択肢は、いずれの場面も、①自己の信念や態度・主張を貫く行動と、②自己の信念や態度・主張と相反する行動とを含むが、強制承諾、意見の不一致、社会道徳の3つの場面では、その他にもう一つの選択肢(両者の折衷的内容など)がある。

回答法は、選択肢からの「行動」選択と、その選択理由を自由に論述する自由記述法からなる。

〈対象〉大学生男子181名、女子256名。

〈実施法〉SI-Co尺度と認知的不協和に関する質問紙を集団的に施行した。その際、「質問紙に設定された事態に自分が置かれたことを想定し回答を与える」という内容の教示がなされ

た。回答所要時間は、15～25分であった。

結果 尺度により、男女別にSI、Co両群それぞれ50名を選出した。そして、両群間に「行動」選択の相違がみられるかどうかを χ^2 -検定により検討した。その結果をTable 7に示す。

Table 7. 各事態での行動選択

事 態	選択肢の内容	M				F			
		SI	Co	χ^2 -値	検定	SI	Co	χ^2 -値	検定
強 制 承 諾	強制承諾に対抗する行動	9	4			5	1		
	強制承諾を甘受する行動	15	26	5.69	N.S.	23	29	3.45	N.S.
	消極的に強制承諾に対抗する行動	25	19			22	20		
意見の不一致	自己主張的行動	15	14			13	9		
	他者への妥協的行動	8	17	5.07	N.S.	7	7	0.98	N.S.
	和合実行的行動	27	18			30	34		
誘 惑	誘惑に流されない行動	43	39			48	49		
	誘惑に屈服する行動	6	8	0.44	N.S.	1	1	0.02	N.S.
義 理	義理に縛られない行動	42	36			45	40		
	義理に従う行動	7	12	1.77	N.S.	5	9	0.82	N.S.
社 会 道 徳	反道徳的行為を許容しない行動	21	18			16	14		
	反道徳的行為を黙認する行動	11	9	0.45	N.S.	3	4	0.29	N.S.
	場面からの逃避行動	16	18			31	32		
信 念 否 定	信念を固持する行動	25	19			15	16		
	信念を変更する行動	22	28	1.54	N.S.	33	33	0.06	N.S.

(注) 不完全な回答は分析から除外したので、度数の合計は必ずしも50にはならない。

男女とも、いずれの場面においても有意差は認められなかった。

次に、行動選択の理由を、選択肢のいずれを問わず、「自己実現的ないし積極的理由づけ」の観点から3名の判定者が分析を行ない、それが大であるものから順に5～1点を付与した。たとえば、義理の項目に対する反応として、「自分の事情を告げ、はっきりことわる」を選択した時、「義理よりも自分の生活が大切である」など、自己の欲求をそのまま表出し、義理が念頭にない場合に5点、「現状で引き受けては十分なこともできないし、かえって恩人に失礼になる」など、義理の重荷から抜けられないでいる場合に1点を付与した。すなわちSI・Co型は行動を特定しない一般的認知傾向であるが、こうした認知傾向と、個別的具体的場面での行動の理由づけとの関係を検討するものである。

さて、この得点をもとに、SI-Co両群間に「理由づけ」の差異が認められるかどうかをt-検定により検定した。Table 8にその結果を示す。いずれも、得点の高いほど、積極的・自己実現的な理由を与えていることを示す。ここでは、女子の「誘惑」の場面を除くすべてに有意差が認められ(すべて $P < .01$)、SI型の者ほど、積極的な理由づけを与えていることが理解される。

考察 本節では、行動の原因の認知傾向に基づく、SI型・Co型それぞれの者の行動特徴

を、認知的不協和の事態の設定により明らかにしようとした。その結果、認知的不協和解消の行動的側面においては有意差は認められなかった。

Table 8. 行動の理由づけの分析

事 態	性	SI	Co	t-値	
強 制 承 諾	M	3.85 (1.32)	2.00 (1.24)	7.08	P<.01
	F	3.84 (1.20)	2.26 (1.48)	5.80	P<.01
意見の不一致	M	4.73 (0.86)	2.02 (1.35)	11.89	P<.01
	F	4.12 (1.03)	2.58 (1.40)	6.20	P<.01
誘 惑	M	4.80 (0.73)	4.12 (1.47)	2.85	P<.01
	F	4.88 (0.22)	4.73 (0.78)	1.31	N.S.
義 理	M	4.38 (1.23)	2.73 (1.75)	5.36	P<.01
	F	4.58 (0.96)	2.23 (1.55)	9.05	P<.01
社 会 道 徳	M	3.96 (1.34)	2.56 (1.58)	4.52	P<.01
	F	4.02 (1.10)	2.31 (1.62)	6.22	P<.01
信 念 否 定	M	4.41 (0.98)	3.29 (1.78)	3.74	P<.01
	F	4.13 (1.31)	2.84 (1.58)	4.38	P<.01

しかし、各場面について行動の理由づけの内容を分析した結果、女子の「誘惑」を除き、行動としては同一であっても、SI型・Co型の両者には、その行動の「意味」に大きな差異がみられることが明らかにされた。つまり、ある状況で、必ずしも表面上、積極的、自己実現的とは思われない行動も、SI型の者には、「自己発展の糧」等に代表される積極的動機が内包されているのであり、Co型のそれとは全く別種の意味あいを持つものである。また、逆に、一見、自己実現的と思われる行動も、Co型の者にはSI型のものほど明瞭な積極的動機が存在しないのである。

以上のように、SI-Co型と認知的不協和解消方法(行動)との関係はあまりみられなかった。これには、その行動の背後にある要因の分析の重要性と同時に、質問紙の限界などが考えられる。今後、「行動」との関係を実験的にとらえる方向で、さらに検討を進めたい。

要 約

本研究では、自己の行動の原因に関する認知を扱った。本稿では自己の行動の原因の認知

傾向として、次の二つの型を設定した。

〈自己の行動の原因は自己の欲求にあると認知する傾向の強い者 (SI型)〉

〈自己の行動の原因は外的強制にあると認知する傾向の強い者 (Co型)〉

この概念に基づき、SI型とCo型を弁別する尺度を作成した。次に、SI型とCo型とで、人生観・社会観等にいかなる差異がみられるかを検討した。最後に、6つの認知的不協和事態で、解決様式に差異が認められるか否かを検討した。

得られた主な結果は、次の通りである。

(1) SIの傾向の強い者とCoの傾向の強い者とがあり、個人をSI型とCo型に分類することが可能である。

(2) SI型の者はCo型の者に比し、自信があり、目的意識を持ち、充実感を得て日々の生活を送っている。また、対人関係ではリーダーシップをとる傾向が強い。さらに男子では、SI型の者ほど他者との関わりを望み、人との交わりを自由に楽しんでおり、多趣味の傾向がある。女子では、SI型の者ほど趣味を娯楽的なものと認識している。

(3) SI型とCo型とで、認知的不協和事態での行動選択に有意差は認められなかった。しかし、行動選択の理由づけを分析したところ、有意な差異がみられた。

文 献

坂西友秀, 宮下一博 1979 行動の動機の認識様式に関する研究

千葉大学教育学部卒業論文 (未公刊)

Bem, D. J. 1965 An experimental analysis of self-persuasion. *J. Exp. Soc. Psychol.*, 1, 199-218.

Brehm, J. W. & Cohen, A. R. 1962 *Explorations in cognitive dissonance*. Willey.

Davison, G. C. & Valins, S. 1969 Maintenance of self-attributed and drug-attributed behavior change. *J. Pers. Soc. Psychol.*, 11, 25-33.

Kiesler, C. A., Nisbett, R. E., & Zanna, M. P. 1969 On inferring one's beliefs from one's own behavior. *J. Per. Soc. Psychol.*, 11, 321-327.

Nisbett, R. E. & Valins, S. 1971 *Perceiving the causes of one's own behavior*. General Learning Press.

Rotter, J. B. 1966 Generalized expectations for internal versus external control of reinforcement. *Psychol. Monographs*, 80, (1, Whole No. 609).

Schachter, S. & Singer, J. E. 1962 Cognitive, social and physiological determinants of emotional state. *Psychol. Rev.*, 69, 379-397.

Solomon, D. & Oberlander, M. I. 1974 Locus of control in the classroom. In Coop, R. H. & White, K. (Eds.), *Psychological concept in the classroom*. 119-150. Happer & Row.

TWO TYPES OF PERCEPTION ON THE CAUSES OF ONE'S OWN BEHAVIORS

KAZUHIRO MIYASHITA, TOMOHIDE BANZAI, & KITSUO NEMOTO

Hiroshima University, Nagoya University, Chiba University

ABSTRACT

The present paper is concerned with the perception on the causes of one's own behaviors. We suppose there are two types of the cognitive tendency. The one is SI(Self-Initiated) type, who perceives the causes of his own behaviors to be his own needs. The other is the Co (Coerced) type, who attributes the own behaviors to the external power.

The purposes of the study are as follows;

1. to construct SI-Co scale,
2. to investigate the relationship between the cognitive tendency and the view of life,
3. to clarify the relationship between the cognitive tendency and the resolution of cognitive dissonance.

The main results are as follows;

1. In comparison with the Co-type, the SI-type is confident, goal-directed, and satisfied. The SI-type usually takes the leadership in interpersonal relations. Furthermore, in the case of male, the SI-type has the strong tendency to keep company with other persons, enjoys its relationship, and has various hobbies. In the case of female, the SI-type tends to recognize the hobby as pleasurable.
2. There are no significant differences in the resolution of the cognitive dissonance. However, when we examine the reason of the behavior choice, the significant relationship between the cognitive tendency and the reason was revealed